

氏名	中 川 麻 記
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第283号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉風骨Ⅰ、風骨Ⅱ、風骨Ⅲ 〈論文〉枯れの風景
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 梅原幸雄
（論文第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 佐藤道信
（作品第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 関出
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 手塚雄二
（ 〃 ）	〃 准教授（ 〃 ） 齋藤典彦

（論文内容の要旨）

ここ数年、植物を多く描いて来たのだが、植物の写生・観察をしていて自分が心惹かれる対象はさらびやかに咲き誇る花よりも、その時期を経過して枯れてきているものだった。枯れているものに華々しかった時の面影を感じ、それが逆に生き物の生命感を際立たせるのだ。じわじわと迫る死、子に受け継がれる生。それが枯れかけたひとつの植物の中に凝縮されているのを見ると、哀しいようしかし恍惚としたころもちになる。自然の中に身を置き感じるそのような陶酔感は、自分の、絵を描くということへの大きな活力へとつながっていく。そのエネルギーを画面にぶつけていき、たちあらわれるものを自分の中の情感と照らし合わせながらさらに描き進める。

枯れていくものになぜ惹かれるのか。見ていて胸が高鳴るのは花だけではない。廃墟や使われなくなったバスが放置されて、そこに草が浸食している光景などにも同様のものがある。廃墟写真家の田中昭二氏は彼の本の中で、廃墟に絡みつく植物がエロティックであることを何度も言っている。枯れていくものは生を引き立てる。引き立てるとはいつても、生のために死があるわけではない。生の果てに死があるのでもない。どんなに輝く生にも死が隠れているのだ。その隠れた部分を引き出して描いている作家に惹かれる。ホルスト・ヤンセンのデッサンには、枯れた花を描いたものが多く見られる。そのデッサンを、十代の時の私が初めて見たときの感動は忘れられない。枯れているのに、その形や色は美しく妖艶だ。彼のデッサンはエロティックである。風景を描いていても、そこになにか生暖かいものが漂い、自画像は狂気をはらんだ「むこうがわ」を感じさせる。枯れていくものの姿は、様々な情感を喚起させる。

そこには何があるのか。そしてそれが自分の制作においてどう作用しているのか。枯れたものを描きたいという欲求をもつ自分に横たわるものが何なのかを、探りながら考察していきたい。

第1章では、まず自分の記憶、まわりの環境により生まれた感覚を検証し、枯れたもの・廃墟などを意識するようになった過程を追う。暗闇を含む風景や、生と死などの境界が滲み合っている境界空間が特に私の心を打ち、美しいと感じさせているが、それは原体験や原風景がその美意識を形成している。境界空間とは、自分の生だけではなく、そのむこうがわにあるものを感じさせる場である。生き物から感じる生命感と、朽ちているものへの漠然とした恐怖、つまり生と死などといった対立する二項が滲み合い、共存する場である。

第2章では、自分がモチーフに選択している花、廃墟、風化しているものなどについて述べながら日

本人の「花」「枯れ」に対する意識、枯れの美意識についても考察する。

また、自分が制作において染料を用いることの必要性に触れる。生きているものは、生き生きとしたシャープな線をたずさえているのに対して、枯れていくものは、はっきりとした形ではなく線も縮んでいて、周りの空気との接し方がはっきりとしていない。枯れていくものを描こうとする時に、周りの空気に溶け込みそうだということは重要である。そのことで、溶け込んでいってしまう向こうがわの世界という存在が浮き上がってくるのだ。枯れていくものの表現のためは、滲みという要因は重要なものである。そこから紙への滲みを意識するようになり、染料に向かうこととなった。

第3章では、自身の制作において重要な役割を持つ、染料についての知識を得るために試したことを述べていく。制作にあたって、そのイメージの実現には、使う素材・材料の理解が不可欠である。染料は布を染めるために使われることが多く、和紙に使用した場合、布のようにはいかないことがある。それを認識し、和紙にもうまく利用できるように技術実験と観察を行った。これを通して「枯れの風景」を表現するための技術を獲得し、素材を理解することが目的である。

第4章では、前章までに述べた事をふまえて自作品を振り返る。

枯れていくものには、色気がある。その色気は、枯れても残る生命力であるといえる。そしてまたそれは、老いて枯れたものと、豊かで華麗なものという反対なるものの成立によって、それらがひとつの世界の中で互いに引きあい、作用し合ってその世界を活性化させていることによるものといえる。それを感じる心の働きが、情感を生みそれを美として感じているのだ。染料はその色気を再現するための素材材だと思う。その色みや偶然の表情と向き合いながら、二つのものが相対する境界の世界を画面にあらわしていったらと考える。

(博士論文審査結果の要旨)

筆者は植物の、とくに枯れかけた状態の植物を描いている。その枯れたものを描きたいという欲求の理由と、それをもつ自分に横たわるものが何かを論究したのが本論文である。

華々しく咲き誇る花よりも、生と死が移ろいの中に凝縮された枯れかけた植物に、筆者は哀しいようなしかし深い恍惚感と陶酔感を感じるという。同様に廃墟や廃棄されたバスに植物が浸入している光景にも、同じものを感じるという。その原体験を、筆者は二つのでき事に求めている。一つは子供の時の隣の空き家。年々伸びる植物に囲まれていく隣家の庭を、秘密の遊び場とした筆者は、陰うつな家の中に入ることはなかったが、好奇心と不安をかきたてられていた。安全な自分の家の日常と、死の気配を感じさせる隣の空き家との往き来。境界を往き来することが、両者の存在を逆に際立たせた。もう一つは、予備校時代に出会ったホルスト・ヤンセンの素描。数多く描かれた枯れた花は、枯れているのに強いエロティシズムと、「向こう側」(死)の世界の存在を感じさせたという。死とエロスが同居するヤンセンの素描は、根底の部分で筆者に大きな影響を与えている。ここから筆者はさらに、アーノルド・ベックリンの「死の島」(1886)や、廃墟、棄てられたバス、また西行の和歌や「さび」の美学などから、死と生がとなり合う美意識をさぐっている。

実際の筆者の作品では、当初は風景画や静物画的な作品も描いているが、近作は暈しの強い、闇の深い枯れた植物を描いている。その“枯れ”の程度は、枯れかけたというより、枯れた状態に近く、とくに博士修了作品の「風骨 浮光」「風骨 眠り」などの「風骨」シリーズは、闇か水中か区別できない程、深い暗色による滲みと暈しで描かれている。じつはこれが、枯れた植物というモチーフの一方で、論文タイトル(「枯れの風景」)にも言う形態と空間が溶けこんだ「風景」とするための、筆者のもう一つの試み、技法と材料の試みの結果でもある。第3章で詳述しているように、筆者は暈すというより滲みの効果を求めて、岩絵具と膠による膠彩ではなく、植物染料を使用した滲みと固着、退色の実験をくり返している。植物を、植物染料で、植物繊維による和紙に描くというイメージ上の統一もあるのかもしれ

ないが、筆者にとっては異なるもの同士が互いに重なっていく“滲み”や“染み”の状況が、生と死が重なり合う筆者の“枯れ”のイメージに、最も近いからなのかもしれない。膠彩よりはるかにデリケートな染料の感触と透明感の方が、ヤンセンの濃密な死と生のエロティシズムとは異なる、筆者なりの枯れへの感性と表現に合っているということなのだろう。

本論文の文体は、記述しようとする状況の質感や感触、温度や湿度、においなど、視覚以外の五覚のニュアンスや、感情の描写にすぐれている。“枯れ”というかなり特殊なテーマに切り込んだ、学位論文にふさわしいユニークな論考として審査会の評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

本研究作品、風骨Ⅰ、風骨Ⅱ、風骨Ⅲは、おもに草木が辿る枯れゆく姿とその周辺に心を向けた作風であり、申請者自身の見方を起程とした研究成果となっている。そこには原風景を含め、微妙な外界の刺激や印象を感受する特性が反映しており、朽ちて陰が増す様態の変化のなかから多くの示唆を受けている。枯れの姿に見出した色彩や濃淡の調子に触発された表現手法には、実験的な工夫がなされ、その取組みの深化による一層の進展が今後も期待される。申請者は、制作の基底物として和紙（麻紙・楮紙）を用い、墨および天然植物染料による靱皮繊維への染み込みや滲みによって、形態の崩れ行くものの様子と魅力の描出を試みている。礬水引き（サイジング／滲み止め）の和紙に、粒度の幅をもつ岩絵具を膠によって厚く彩色を重ねる方法で得られる画面の質を求めず、染料による生紙に溶け込むような滲み具合によって、「枯れの風景」に関するイメージの具現を目指している。一方、発色、定着、退色、劣化などについては、染料を用いて和紙に絵画表現することの技術的な課題点が多い。

「風骨一池（100×100cm）」「風骨一翳り（144.0×65.0cm）」「風骨一眠り（215.0×200.0cm）」「風骨Ⅰ－Ⅳ（各175.0×70.0cm）」の紙本彩色による作品のタイトルは、申請者が枯れるものの姿を見つめていくうちに、そこに骨のようなものが隠れている印象を受けたことによるもので、一連のテーマを追求した作品である。植物染料の、生の紙に滲んでできた表情を下地とし、或いは微粒子の顔料によって、朽ち行く植物の生滅・変化を折々の形象を欠片として画面に位置付けている。

絵画制作において、申請者は枯れていくものに魅力を感じ、染料はその色気を再現するための素材だと論文のおわりに記している。和紙に岩絵具を厚く塗り重ねる表現ではなく、また絵絹を基底物として暈しや裏彩色などの効果を選ばず、「枯れの風景」を表現するにあたって、和紙と染料を基軸とした素材研究を推進している。

これらの審査対象の作品には一貫した研究の蓄積による成果が示され、絵画表現において優れており、水準に達しているものと全員で判定した。

(総合審査結果の要旨)

申請者は東京藝術大学絵画科日本画を卒業以降、大学院修士課程、博士課程を通じ、常に植物を主題に創作研究を行ってきた。一貫して静けさある、枯れた色調で“枯れかかるもの”を描いていたが、しかしながらその表現は生々しくも独特の雰囲気があり、注視してきた。

博士後期課程に入学後、自作品の作品が表れるまでの過程を分析し、「枯れの風景」と題し“枯れたものに心惹かれることの原点”を幼児期の体験及び生活してきた環境から解明し、考察してきた。学位論文に取りかかった2008年以降、申請者のもつ作品の独自さがより一層明確となり、より魅力ある作品になっている。

また、枯れていくものの過程に感じる色気を強く感じ、絵画制作を行うための素材研究にも力を注い

できた。特に、申請者は日本画制作にはあまり使用されなかった染色材料の研究を行い、染色家 山崎和樹氏の運営する神奈川県川崎市に所在する「草木染研究所 柿生工房」を訪ねる等、日本画の基底材料との適合性を研究し作品に生かしている。

提出作品「風骨-眠り-」、「風骨Ⅰ」、「風骨Ⅱ」、「風骨Ⅲ」、「風骨Ⅳ」は、申請者が考察する「枯れ」から「生」へと変換する情感かつ色気のイメージがより鮮明になり、本来の日本画であまり使用されなかった染料と基底材料（紙）を生かし、切れ味よく仕上げていることが高く評価出来る。総じて未完成ながら、今後の可能性を感じさせる秀作である。

学位論文においても自己の心理分析を行い、作画過程における創作心理を論じ、論文としての一方向を示している。素材研究についても画面に持っていく行程を論理的に解説しており、独自性も感じられる。

2010年1月14日、主査、副査である日本画研究室教員の4名、及び論文担当第一副査、佐藤道信准教授と共に審査委員会を行い博士学位授与に値すると判断し合格とした。